

平成31年度東京大学学部入学式 祝辞

by [日本]上野 千鶴子

translation from IKIDANE NIPPON

日本語:

ご入学おめでとうございます。あなたたちは激しい競争を勝ち抜いてこの場に来ることができました。

女子学生の置かれている現実

その選抜試験が公正なものであることをあなたたちは疑っておられないと思います。もし不公平であれば、怒りが湧くでしょう。が、しかし、昨年、東京医科大不正入試問題が発覚し、女子学生と浪人生に差別があることが判明しました。文科省が全国81の医科大・医学部の全数調査を実施したところ、女子学生の入りにくさ、すなわち女子学生の合格率に対する男子学生の合格率は平均1.2倍と出ました。問題の東医大は1.29、最高が順天堂大の1.67、上位には昭和大、日本大、慶応大などの私学が並んでいます。1.0よりも低い、すなわち女子学生の方が入りやすい大学には鳥取大、島根大、徳島大、弘前大などの地方国立大医学部が並んでいます。ちなみに東京大学理科3類は1.03、平均よりは低いですが1.0よりは高い、この数字をどう読み解けばよいでしょうか。統計は大事です、それをもとに考察が成り立つのですから。

女子学生が男子学生より合格しにくいのは、男子受験生の成績の方がよいからでしょうか？ 全国医学部調査結果を公表した文科省の担当者が、こんなコメントを述べています。「男子優位の学部、学科は他に見当たらず、理工系も文系も女子が優位な場合が多い」。ということは、医学部を除く他学部では、女子の入りにくさは1以下であること、医学部が1を越えていることには、なんらかの説明が要ることを意味します。

事実、各種のデータが、女子受験生の偏差値の方が男子受験生より高いことを証明しています。まず第1に女子学生は浪人を避けるために余裕を持って受験先を決める傾向があります。第2に東京大学入学者の女性比率は長期にわたって「2割の壁」を越えません。今年度に至っては18.1%と前年度を下回りました。統計的には偏差値の正規分布に男女差はありませんから、男子学生以上に優秀な女子学生が東大を受験していることになります。第3に、4年制大学進学率そのものに性別によるギャップがあります。2016年度の学校基本調査によれば4年制大学進学率は男子

55.6%、女子48.2%と7ポイントもの差があります。この差は成績の差ではありません。「息子は大学まで、娘は短大まで」でよいと考える親の性差別の結果です。

最近ノーベル平和賞受賞者のマララ・ユスフザイさんが日本を訪れて「女子教育」の必要性を訴えました。それはパキスタンにとっては重要だが、日本には無関係でしょうか。「どうせ女の子だし」「しょせん女の子だから」と水をかけ、足を引っ張ることを、aspirationのcooling downすなわち意欲の冷却効果と言います。マララさんのお父さんは、「どうやって娘を育てたか」と訊かれて、「娘の翼を折らないようにしてきた」と答えました。そのとおり、多くの娘たちは、子どもなら誰でも持っている翼を折られてきたのです。

そうやって東大に頑張って進学した男女学生を待っているのは、どんな環境でしょうか。他大学との合コン（合同コンパ）で東大の男子学生はもてます。東大の女子学生からはこんな話を聞きました。「キミ、どこの大学？」と訊かれたら、「東京、の、大学...」と答えるのだそうです。なぜかといえば「東大」といえば、退かれるから、だそうです。なぜ男子学生は東大生であることに誇りが持てるのに、女子学生は答えに躊躇するのでしょうか。なぜなら、男性の価値と成績のよさは一致しているのに、女性の価値と成績のよさとのあいだには、ねじれがあるからです。女子は子どものときから「かわいい」ことを期待されます。ところで「かわいい」とはどんな価値でしょうか？ 愛される、選ばれる、守ってもらえる価値には、相手を絶対におびやかさないという保証が含まれています。だから女子は、自分が成績がいいことや、東大生であることを隠そうとするのです。

東大工学部と大学院の男子学生5人が、私大の女子学生を集団で性的に凌辱した事件がありました。加害者の男子学生は3人が退学、2人が停学処分を受けました。この事件をモデルにして姫野カオルコさんという作家が『彼女は頭が悪いから』という小説を書き、昨年それをテーマに学内でシンポジウムが開かれました。「彼女は頭が悪いから」というのは、取り調べの過程で、実際に加害者の男子学生が口にしたコトバだそうです。この作品を読めば、東大の男子学生が社会からどんな目で見られているかがわかります。

東大には今でも東大女子が実質的に入れず、他大学の女子のみに参加を認める男子サークルがあると聞きました。わたしが学生だった半世紀前にも同じようなサークルがありました。それが半世紀後の今日も続いているとは驚きです。この3月に東京大学男女共同参画担当理事・副学長名で、女子学生排除は「東大憲章」が唱える平等の理念に反すると警告を発しました。

これまであなたたちが過ごしてきた学校は、タテマエ平等の社会でした。偏差値競争に男女別はありません。ですが、大学に入る時点ですでに隠れた性差別が始まっています。社会に出れば、もっとあからさまな性差別が横行しています。東京大学もまた、残念ながらその例のひとつです。

学部においておよそ20%の女子学生比率は、大学院になると修士課程で25%、博士課程で30.7%になります。その先、研究職となると、助教の女性比率は18.2、准教授で11.6、教授職で7.8%と低下します。これは国会議員の女性比率より低い数字です。女性学部長・研究科長は15人のうち1人、歴代総長には女性はいません。

女性学のパイオニアとして

こういうことを研究する学問が40年前に生まれました。女性学という学問です。のちにジェンダー研究と呼ばれるようになりました。私が学生だったころ、女性学という学問はこの世にありませんでした。なかったから、作りました。女性学は大学の外で生まれて、大学の中に参入しました。4半世紀前、私が東京大学に赴任したとき、私は文学部で3人目の女性教員でした。そして女性学を教壇で教える立場に立ちました。女性学を始めてみたら、世の中は解かれていない謎だらけでした。どうして男は仕事で女は家事、って決まっているの？主婦ってなあに、何する人？ナプキンやタンポンがなかった時代には、月経用品は何を使っていたの？日本の歴史に同性愛者はいたの？...誰も調べたことがなかったから、先行研究というものがありません。ですから何をやってもその分野のパイオニア、第1人者になれたのです。今日東京大学では、主婦の研究でも、少女マンガの研究でもセクシュアリティの研究でも学位がとれますが、それは私たちが新しい分野に取り組んで、闘ってきたからです。そして私を突き動かしてきたのは、あくことなき好奇心と、社会の不公正に対する怒りでした。

学問にもベンチャーがあります。衰退していく学問に対して、あたらしく勃興していく学問があります。女性学はベンチャーでした。女性学にかぎらず、環境学、情報学、障害学などさまざまな新しい分野が生まれました。時代の変化がそれを求めたからです。

変化と多様性に拓かれた大学

言っておきますが、東京大学は変化と多様性に拓かれた大学です。わたしのような者を採用し、この場に立たせたことがその証です。東大には、在日韓国人教授、姜尚中さんも、高卒の教授、安藤忠雄さんもいました。また盲ろう二重の障害者である教授、福島智さんもいらっしゃいます。

あなたたちは選抜されてここに来ました。東大生ひとりあたりにかかる国費負担は年間500万円と言われています。これから4年間すばらしい教育学習環境があなたたちを待っています。そのすばらしさは、ここで教えた経験のある私が請け合います。

あなたたちはがんばれば報われる、と思ってここまで来たはずですが、冒頭で不正入試に触れたとおり、がんばってもそれが公正に報われない社会があなたたちを待っています。そしてがんばったら報われるとあなたがたが思えることそのものが、あなたがたの努力の成果ではなく、環境のおかげだったこと忘れないようにしてください。あなたたちが今日「がんばったら報われる」と思えるのは、これまであなたたちの周囲の環境が、あなたたちを励まし、背を押し、手を持ってひきあげ、やりとげたことを評価してほめてくれたからこそです。世の中には、がんばっても報われないひと、がんばろうにもがんばれないひと、がんばりすぎて心と体をこわしたひと...たちがいます。がんばる前から、「しよせんおまえなんか」「どうせわたしなんて」とがんばる意欲をくじかれるひとたちもいます。

あなたたちのがんばりを、どうぞ自分が勝ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれないひとびとを貶めるためにではなく、そういうひとびとを助けるために使ってください。そして強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください。女性学を生んだのはフェミニズムという女性運動ですが、フェミニズムはけっして女も男のようにふるまいたいとか、弱者が強者になりたいという思想ではありません。フェミニズムは弱者が弱者のままで尊重されることを求める思想です。

東京大学で学ぶ価値

あなた方を待ち受けているのは、これまでのセオリーが当てはまらない、予測不可能な未知の世界です。これまであなた方は正解のある知を求めてきました。これからあなた方を待っているのは、正解のない問いに満ちた世界です。学内に多様性がなぜ必要かと言えば、新しい価値とはシステムとシステムのあいだ、異文化が摩擦するところに生まれるからです。学内にとどまる必要はありません。東大には海外留学や国際交流、国内の地域課題の解決に関わる活動をサポートする仕組みもあります。未知を求めて、よその世界にも飛び出してください。異文化を怖れる必要はありません。人間が生きていくところのなら、どこでも生きていけます。あなた方には、東大ブランドがまったく通用しない世界でも、どんな環境でも、どんな世界でも、たとえ難民になっても、生きていける知を身につけてもらいたい。大学で学ぶ価値とは、すでにある知を身につけることではなく、これまで誰も見たことのない知を生み出すための知を身に付けることだと、わたしは確信しています。知を生み出す知を、メタ知識といいます。そのメタ知識を学生に身につけてもらうことこそが、大学の使命です。ようこそ、東京大学へ。

平成31年4月12日

認定NPO法人 ウィメンズ アクション ネットワーク理事長

上野 千鶴子

※一部事実と異なる表記がありましたので、4月16日付けで修正しました。

中国語：

首先恭喜各位同学考入东京大学。你们从激烈的竞争中脱颖而出，才来到了这里。

女学生们面对的现实

对于这个选拔考试的公正性，你们想必是深信不疑的。若是出现了不公正，一定会气愤不已吧。但是去年，东京医科大学被查出考试不公，他们对女学生和复读生的差别对待已经确认无疑。文科省对全国81所医科大学医学部展开了全面调查，结果是这样的，女性学生的入学难度更高，换句话说男性学生的合格率相比女性学生合格率的比值，平均为1.2倍。被查出问题的东医大的该数值为1.29，最高的顺天堂大学为1.67，处于前列的还有昭和大学、日本大学、庆应义塾大学等私立大

学。比1.0低的，也就是女生更容易考入的大学有鸟取大学、岛根大学、德岛大学、弘前大学等地方国立大学的医学部。顺带一提，东京大学理科3类的该数值为1.03，虽然比平均值要低，但是也高于了1.0，这个数字应当如何解读呢？统计很重要，因为基于统计的考察才能成立。

女学生比男学生更难合格，是不是就意味着男性考生的成绩比较好呢？公布全国医学部调查结果的文科省负责人作出了这样的评论：「男生处于优势地位的学部，除了医学部没有其他的了，无论是理工科还是文科基本都是女生更有优势。」也就是说，除了医学部以外的其他学部，女生的合格难度都低于1，唯独医学部的数值在1以上，这似乎意味着需要做出点解释吧。

事实上，有各种数据可以证明女性考生的偏差值比男性更高（即成绩更好）。首先，女学生们为了避免落榜，会倾向于选择更有把握的目标学校。其次，东京大学入学者中的女生比例长期无法跨越「2成之壁」，今年甚至比去年更低，仅为18.1%；统计上的偏差值正态分布并没有男女之差，因此会来参加东大考试的女生原本就比男生更加优秀。第三，原本4年制大学入学率上就出现了性别差。根据2016年的学校基本调查，4年制大学入学率男生为55.6%，女生却为48.2%，有7个百分点的差距。这个差距并非成绩的差距，而是信奉「儿子上大学，女儿上短期大学」的父母的性别歧视的结果。

最近获得诺贝尔奖的马拉拉·优素福扎伊在来访日本时强调了「女性教育」的重要性。但那不过是巴基斯坦的事，跟日本没什么关系吧？「反正是女孩」、「因为不过是女孩」像这样浇冷水的事情，我们管它叫意欲冷却效果。马拉拉的父亲在被问到「您是如何培养您女儿的」的时候，他回答说「不折断她的翅膀」。正如所言，很多的女孩子们，都早已被折断了那双所有小孩子都曾拥有的翅膀。

等待着拼命努力进到东大来的男生女生们的，又是怎样的环境呢？在和其他大学举办的联谊活动中，东大的男生会很受欢迎，但从东大女生口中，却听到了这样的声音——在被问到「你是哪个大学的？」的时候，会回答「东京.....的.....大学.....」。究其原因，说是不知为何若是听到「东大」对方就会退缩。为什么男生在自称东大生的时候就可以挺胸抬头视为荣耀，女生却要踌躇不决呢？说到底，男性的价值所在与成绩的优秀一致，女性的价值所在却与优秀的成绩之间存在着扭曲。女生自小就被期待着“可爱”，然而可爱又有什么价值呢？被爱、被选择、被保护，这样的价值中包含着绝对不要威胁到对方的保证，所以对于女生们而言不管是成绩优秀也好上了东大也罢，居然都是需要隐瞒的事情。

（2016年）发生了东大工学部和大学院院的5个男生对私立大学女生进行集团性猥亵的事件，加害者中3人被退学，2人受到停学处分。作家姬野KAORUKO以这个事件为原型写了一本名为《因为她脑子笨》（彼女は頭が悪いから）的小说，去年还以此为题在学校里开了论坛。「因为她脑子笨」是在调查过程中加害的男生实实在在说出来的话。若是读过这本作品，便可知道社会是用怎样的眼光来看待东大男生的了。

据说，东大至今都还有本校女生实质上不被允许参加、只有校外女生才能参加的男生社团。半世纪前我的学生时代有同样的社团存在，没想到半世纪后的如今还依然健在，我深感震惊。这个三月，东京大学男女共同参与计划担当理事和副校长已经对于这种违反《东大宪章》所倡导的平等理念、排除女学生的行为予以了警告。

如今你们所经历过的学校，还算是表面平等的社会，在偏差值竞争上男女无别。但是，在你们进入大学的瞬间，隐性的性别歧视就已经开始了。等你们出了社会，还会有更多明目张胆的性别歧视肆意横行。东京大学，很遗憾，也不过是其中之一。

学部里的女生比例约为20%，大学院里修士课程的女生比例为25%，博士课程则为30.7%。再之后，进入研究职位以后，助教的女性比例为18.2，准教授11.6%，教授则只有7.8%。这甚至比国会议员的女性比例都还要低。学部长、研究科长15人中只有一位女性，历代校长则从未有过女性的身影。

作为女性学的先驱

研究这种问题的学问诞生于40年前，即女性学，之后被逐渐称为性别研究（gender studies）。在我还是学生的时候，还不存在女性学这一门学科。正因为不存在，所以才被创造了出来。女性学诞生于大学之外，又进入到大学之内。25年前，我赴任东大之时，成为了文学部的第三名女性教员，之后担任在讲坛上传授女性学知识的工作。开始研究女性学之后，世间变得充满了未解之谜。为什么要规定男性在职场工作，女性在家里做家务？主妇到底是什么样的存在，做什么事的人？餐巾纸、卫生巾还未发明出来的年代，月经用品都用的是什​​么？日本历史中出现过同性恋吗？.....这些内容因为谁也没调查过，所以也就不存在所谓的先行研究，因此无论做什么都会成为这个领域的先锋、第一人。在现在的东京大学，做主妇研究、少女漫画研究、性少数研究能够获得学位，正是因为我们曾埋头于全新的领域、战斗而来的成果。而曾刺激我奋起的，正是永无休止的好奇心和对不公正社会的愤怒。

学术之中也有冒险。有如日落西山般的学科，也有如初生朝阳般的学问。女性学就是这样的冒险。不仅限于女性学，环境学、情报学（信息科学）、残障学等很多新兴领域相继诞生，因为时代的变化在渴求它们。

由变化与多样性开拓出的大学

在我看来，东京大学正是由变化与多样性开拓出的大学。聘用我，让我站在这里便是证明。在东大内，有国立大学首位在日韩裔教授姜尚中老师，有国立大学首位持有高中学历的教授安藤忠雄老师，也有身患盲聋哑三重残疾的教授福岛智老师。

你们在经受选拔之后来到这里。据说培养每一位元东大生所需要的政府费用一年为500万日元（约合新台币138万）。从今往后的4年间，等待你们的将是极其优越的教育环境。这份优越，在这里有过执教经验的我可以作担保。

你们应该是抱着「努力就能获得回报」的这份信念而来。但是，正如开头所提到的违规入试一样，即使努力也无法获得公正回报的社会一样在等着你们。并且请不要忘记，你们所想的「努力就能获得回报」的这份信念，不是因为你们努力的成果，而是受环境的恩惠使然。你们能够在今天想到「努力就能获得回报」，正是一直以来你们周围的环境在激励、在背后一直扶持着你们，表扬你们

成绩的结果。在这世界上，有即使努力也无法获得回报的人、想努力也无法努力的人、太过努力以至于身心受到摧残的人，也有「就凭你」、「反正我这种人就是不行」等在开始努力之前积极性就遭到打击的人。

请不要把你们的这份努力，仅用在自己获得最终胜利的这件事情上。这份受惠的环境与能力，请不要用来贬低没有受惠的人们，而应该用来帮助他们。不要逞强，承认自己弱小的一面，互相扶持着生活下去。虽然是女权主义这项女性运动孕育出的女性学，但女权主义绝不是让女性的言行举止像男性一样，也不是让弱者变身为强者这样的思想。女权主义是追求让弱者能够以弱者的身份受到尊重的思想。

在东京大学学习的价值

等待你们的，是以往的理论无法验证，也无法预测的未知世界。一直以来，你们所追求的是有正确答案的智慧。而今后等待你们的，将是充满没有正确答案的疑问满载的世界。若要问学校内为何需要多样性，那是因为全新的价值诞生在系统与系统之间，诞生在异文化产生摩擦之处。不必将它限制在学校范围内。东大有国外留学和国际交流、支持解决日本国内地区课题的相关组织。请你们追求未知，探索周围的世界吧，不必害怕异文化。人只要是还活着，无论在哪里都能够活下去。无论是在东大这块招牌完全不通用的世界、或是任何环境、任何世界、哪怕是成为难民，也请你们努力学习生存下去的智慧。我坚信，在大学中获得的价值，并不是掌握既有知识，而是掌握住令此前谁也未曾接触过的知识诞生的知识。孕育知识的知识，我们称之为元知识。而让学生掌握元知识，正是大学的使命。

东京大学，欢迎你们的到来。

平成31年4月12日

NPO法人 Women's Action Network 理事长

上野 千鹤子